



周王朝の建国① (殷周の交代)

4月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2023年4月1日(土)

有徳の人、湯王が興した殷も、不徳の子孫紂王の悪政により滅亡する。その後中国の支配者になったのは周である。周は后稷に始まり、古公の孫西伯(文王)の時代に諸侯の信望を集め建国する。

西伯の父は、李歴であるが、李歴には太伯と虞仲の二人の兄があった。

父の古公が我が周は孫の昌(西伯)の時代に隆盛に向かうと言って、国を昌に伝えたがっていることを悟り、太伯と虞仲の二人は荊蛮の地へ出奔した。

荊蛮の地とは黄河流域の周から遠く離れた、長江流域の荊(楚)や蛮(越)などの未開、野蛮の地である。

殷王紂は、西伯が仁政に努め、賢者を遇し、人材を集めるのを見て、このまま放置しておくとは殷の禍となると、文王を羑里に幽閉した。西伯は、美女や名馬や珍しい品々、そして洛西の地を紂王に献上し許しを受けた。

紂王は生まれつき弁舌に長け、頭の回転も速く、猛獣を素手で倒すほどの怪力の持ち主でもあった。

頭が切れるので、臣下の下手な諫言なども効果がなく、酒が好きで溺れるほど飲み、女色にもふけた。とりわけ「妲己」という美女を寵愛し、楽師に命じて、「北里の舞」、「靡靡の楽」といった官能的な音楽を作らせた。

また、苛酷な租税を課して、鹿台の府に財貨を貯え、倉に食糧を満たし、神をもうやうこともなく、殷の悪政は諸侯の悪評を買った。

紂王の悪政とは逆に周の西伯の評判は高まり、諸侯の期待は集まった。しかし、紂王は「わしの帝王の地位は天命で定まっているのだ」と西伯の活動を気にかけて悪政を続けた。

西伯(文王)が死に、太子発が立って「周の武王」となった。

武王は即位すると、軍師には「太公望」を、介添役には弟の「周公旦」を任命し、文王の事業の継承に努めた。

紂王の無道は際限を知らず、武王は「紂の罪は許せぬ。もはや討伐あるのみ」と、諸侯を糾合して紂王を攻めた。

紂王は、周を大きく上回る殷の70万の大軍を繰り出し応戦したが、武王と諸侯の連合軍の意気と味方の反乱によって総崩れとなった。王都に逃げ帰った紂王は、珠玉を身にまとうて焼身自殺し、世は殷から周へと変わった。

参考：(司馬遷史記、周本紀、徳間書店)